

Title	<雜録> きゝがき
Author(s)	H., T.
Citation	東洋史研究 (1942), 7(2-3): 176-176
Issue Date	1942-07-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138822
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

きゝがき

みんな北京のはなしだ。

事變以來、なんとかしなければならんと口々にいはれてゐた、清華大學の本が昨年の春あたりからどん／＼整理され始めた。若城さんなど満鐵を代表して毎日暑いのに大へんな氣張り方だった。大體始めから少しはなくなつてゐたのだらうが、洋書は近代科學圖書館に、漢籍は大部分北京大學に分割されたとか。これなど、すべて一纏めに置いて置いた方がよかつたのに、惜しいことだと思ふ。燕京大學の本はどうなのだらう。

北京の建設總署では、市内の古建築物の修理を盛んにやつてゐるといふ。

孔子廟が立派になつてゆくのは自分も目撃したが、この春には天安門の修理にとりかゝり、大仕掛けな足場が組まれたさうだ。この方面の經費は年百萬圓を計上してあるといふから、時節柄偉いものだ。

さうかと思ふと、また變な話を耳にする。北京大學圖書館の所藏品の中では、ピカ一の一つである藝風堂金石拓本が、一夜のうちに——いや白晝かも知れない——忽然と消えてなくなつたさうだ。この春のことだ。あの大部のものが、いくら腕さゝの泥棒でも一寸容易に持ち出せるものではない。奇怪

なことだ。北京でさへこんな状態では他は推して知るべし。最近のニュースによると、來學年から北京大學では研究院が開設されるといふことである。

東方文化事業總委員會がとう／＼この三月に閉鎖されたとか。北京在留中の三月／＼は、どれだけあの圖書館の恩恵を蒙つたことだらう。あの美しく花の咲き亂れた、日當りのよい院子を思ふ。大東亞戰爭と共に、敵性文化機關が悉く一掃されてしまつた中にあつて嚴然としてその存在を誇るべき筈だったのに、どうしてこんなものをなくしてしまふのだらう。一抹の寂しさを感じる。

(T・H)